

“この人に学ぶ”

第12回 松下幸之助



全管連 技術参与 小泉智和

“この人に学ぶ”の最終回は、日本で最も尊敬される実業家で経営の神様と言われる松下幸之助をご紹介します。

わずか9歳で丁稚奉公に出て、苦勞をしますがくじけることもなく、何時もプラス思考で発想し、世界に誇る松下電器（現、パナソニック）を創業しました。

松下電気器具製作所は、大正7年（1918）創業ですが、松下の創業記念日は、昭和7年（1932）5月5日としています。松下幸之助が自らの目的・使命感と経営の方向性を明確に定め、社員に宣言した日です。彼は、社員を前にして「…水道の水は加工された値のある物であるが、道端の水道水を通行人が飲んでも誰にも咎められることはない。それはその量が豊富で、価格があまりにも安価だからである。産業人の使命も、水道の水のごとく、物質を安価無尽蔵たらしめ、無代に等しい価格で提供することにある。それによって、人生に幸せをもたらし、この地に極楽楽土を建設する事が出来るのである。松下電器の真使命もまたその点にある…」との“水道哲学”を述べ、250年後を見据えた壮大な計画を提示しました。



松下幸之助（Yahoo画像より）

○松下幸之助の生涯

明治27年（1894）、和歌山県和佐村（現・和歌山市^{ねぎ}彌直）で小地主松下政楠の三男として生まれました。

父が米相場で失敗、小学4年・9歳で大阪の火鉢屋に丁稚奉公に出され、翌年、五代^{ごだい}自転車店に移ります。この頃、大阪市に導入された市電を見て電気事業にあこがれ、明治43年・15歳で大阪電燈（現・関西電力）に就職しますが、亡父の「商売で身を立てよ」の言葉が耳から離れず、大正6年（1917）大阪電燈を依願退職して大阪府鶴橋町の借家を工場代わりとして、妻むめの、むめのの弟（15歳）^{いぶかとしお}井植歳男（戦後、三洋電機を創業）及び友人2名の計5人でソケットの製造販売に着手します。

その後、二灯用差し込みプラグがヒッ

ト、事業を拡大して大正7年（1918）に大阪市大開町に松下電気器具製作所を創業します。昭和2年（1935）から「ナショナル」の商標を使用。昭和4年の世界恐慌では、株価大暴落、不景気により工場閉鎖、従業員解雇の会社が増える中で、松下は在庫一掃セールなどを行い、社員を辞めさせないで難局をしのぎました。昭和8年、^{かどま}門真に大規模工場を建設、同10年（1929）に松下電器産業に改組しています。

戦時には、軍の要請で木造軍船の建造や強化合板・木製飛行機の製造を行います。このため、戦後、松下家はGHQから財閥指定、資産凍結、公職追放などの制限を受けます。これに対し、労働組合や代理店がGHQに嘆願、公職追放は解

除され、朝鮮戦争後にはその他制限も解除されるようになりました。

昭和26年初渡米、大量生産システムを目の当たりにして、そのシステムを導入します。

昭和30年代初めの好景気で三種の神器（テレビ、洗濯機、冷蔵庫）を始め、掃除機、炊飯器といった家庭電化がブームとなり、松下は日本を代表する企業に発展します。

昭和36年、社長を娘婿・松下政治に譲り会長に就任し、第一線から退きました。

波乱万丈の松下幸之助も昭和64年（1989）、大阪守口市の松下記念病院で94歳の幕を下ろしました。妻のむめのは、平成5年（1993）、97歳で亡くなりました。



11歳の幸之助と五代自転車店主夫人
（パナソニックミュージアムより）



25歳の頃、後列左が幸之助、中が井植齡男、右がむめの
前列はむめのの姉妹たち（パナソニックミュージアムより）

○幸之助の名言

松下幸之助は、創業以来、たくさんの言葉を残していますが、その中から幾つかをご紹介します。

- ・自分には自分に与えられた道がある。広いときも狭いときもある。登りもあれば下りもある。思案に余るときもあ

るだろう。しかし、心を定め 希望をもって歩むならば必ず道は開けてくる。深い喜びもそこから生まれてくる。

- ・人と比較して劣っているといっても、決して恥じることはない。けれども、去年の自分と今年の自分とを比較して、もしも今年が劣っているとした

ら、それこそ恥ずべきことである。

- 志を立てるのに、老いも若きもない。そして志あるところ、老いも若きも道は必ず開けるのである。
- 事をなす人は、必ず時の来るのを待つ。
- 商売とは、感動を与えることである。
- 小利口に儲けることを考えたらあきません。世の中にぼろいことはないから、結局流した汗水の量に比較して、成功するわけですね。汗もかかずして、成功することはたまにはありますけど、それは極めて僥倖ぎょうこうな人で、普通はない。
- 万策尽きたと思うな。自ら断崖絶壁の淵に立て。その時初めて新たなる風は必ず吹く。

○松下のその後

松下は、松下電気器具製作所→(商標・ナショナル)→松下電器産業→パナソニックと名を変えています。幸之助のイズムは今も変わらず脈々と受け継がれています。

- PHP (Peace and Happiness through Prosperity: 繁栄によって平和と幸せを)

戦後の混乱の時期、「自然界に生きる鳥や獣は山野を嬉々として飛び回っている。…人間はもっともっと物心ともに豊かな繁栄のうちに、平和で幸せに生きることができはずだ。…必ずどこかに、繁栄、平和、幸せにつながる道があるはずだ。それを何とかして求めてみたい」として、昭和21年(1946)、PHP研究所を創設、自ら所長として活動を始め

ました。以来75年、PHP研究所は、研究、出版・普及、啓発・実践を3つの柱として事業を展開しています。

• 公益財団法人「松下政経塾」

「物と心の繁栄を通じて、平和で幸せな社会を実現したい」と願う強い心から、昭和54年(1979)、84歳にして、「我が国を導く真のリーダーを育成しなければならぬ」として、松下政経塾を設立、自ら塾長となりました。

それから40年、卒業生は285人、政治家(現職国会議員は33人、他)、企業経営者、教育者など、様々な分野で活躍するリーダーを輩出しています。

パナソニックは、平成20年(2008)に松下電器産業から社名を変更していますが、昭和4年に松下が述べた「産業人タルノ本分ニ徹シ 社会生活ノ改善ト向上ヲ図リ 世界文化ノ進展ニ 寄与センコトヲ期ス」を今なお綱領としています。今日、家電製品の国内市場シェアは27.5%を誇っており、他に車載設備、住宅設備、エネルギーマネジメント機器などを核とした成長戦略を加速させています。

○幸之助ゆかりの地巡り

生誕の地和歌山市には松下公園があり、そこには同郷の湯川秀樹博士きごう揮毫による「松下幸之助君生誕の地」の石碑があります。終焉は大阪守口市の松下記念病院でしたが、お墓は生誕地に建立されています。

松下創業の地は大阪、現在も本社は大阪市門真市です(本社事務所は守口市)。



浅草寺雷門（浅草寺公式サイトより）

門真市のパナソニックミュージアムには、創業者松下幸之助の足跡を資料と映像で展示している「松下幸之助歴史館」と歴代の数々の家電商品や昔懐かしい広告・宣伝などが楽しめる「ものづくりイズム館」があります。

京都市には「松下資料館」があり、松下幸之助が理想とした人間としての生き方、人生の考え方、企業経営のあり方、そして国家社会・世界の展望に至る幅広い内容を、著作や映像、グラフィックパネル等を用いて展示しています。

昭和14年に建設された松下幸之助の私邸“光雲荘”は、パナソニックの迎賓館として利用されてきましたが、平成21年、兵庫県西宮市から大阪府枚方市ひらかたしに移設して同社の研修施設として利用されています（一般公開はしていません）。

東京の江東区有明には、バーチャルショールームの「パナソニックセンター東京」があります。臨海部のオリンピック施設を回り、最後にパナソニックセンターを案内するのが、私が所属する東京シティガイドクラブの修学旅行・定番コースとなっています。

浅草観音雷門は、慶応元年（1866）の火災消失以後、明治・大正と100年近くその姿を消していました。昭和33年、かつて松下の神経痛平癒を祈祷した浅草寺貫主が上京中の松下に再建協力を依頼し、私財の寄進により昭和35年に雷門は再建されました。その時、「雷門」と書かれた大提灯も奉納されました。ちょうちんの下輪には「松下電器産業株式会社 松下幸之助」、背面には現在（付け替え）の寄贈者「パナソニック株式会社」が小書きされています。

管工事組合の皆さん、その家族の方が東京に来られたら、小泉がご案内します。

申し込み：全管連事務局 無料（交通費はご負担ください）

*参考資料

「リーダーになる人に知っておいてほしいこと」

松下幸之助述 松下政経塾編

「図解・松下電器」

日刊工業新聞社編